

「神楽の舎五百首」

— 弾琴緒の出版事業 —

はじめに

弾琴緒^(註)は歌人として和歌社中を運営しながら、新時代の技術である活版印刷によって歌集専門の出版社を経営するという、商才ある人物である。

歌集専門を掲げ「大阪東区高麗橋通中橋筋西入南側 彈舜平邸内 桐園出版掛」と高麗橋にあった自宅に出版社を置き、歌人として縁故も使い、自費出版の委託も受けて、歌集だけでなく点数は少ないが俳書句集の出版にもあたっている。歌書と俳書は一行に一首（一句）を組むという、活字に組む際の技術が同じであることと、書籍購入客も和歌と俳諧の両様に手を染める人が少なくないからであった、注文出版には和歌俳諧の両様を請け負っている。

この時期（明治二十年～四十年）には、木版・銅板・活版・石版とあらゆる出版印刷技術が行われたなかで、伝統的な歌書俳書は自筆版下が尊ばれ、京都の俳書は銅板の俳書に注目すべきものが少なくないが、文明開花期の新技術として、版面を整版に仕上げるという方に馴れた木版職人たちが流れたものらしいが、銅版を用いるために費用が新技術出版方法のなかで最も経費のかかるものであり、

管 宗 次

そのために贅沢な私家版の俳書が多いということとなったようである。巧緻繊細な挿絵もあるという俳書は文明開花期の出版物として興味深いが、弾琴緒の歌集歌書は腕のいい職人は不要で比較的安い費用で出版にあたるということが大切であった。

和歌俳諧の両様に手を染めるというのは、新派の正岡子規にしても短歌・俳句を兼ねており、蕪村門の俳人たち（月居や月溪）にも和歌短冊を時折見かけるが、短冊という料紙は和歌染筆のために始まったために、韻文として染筆した場合、短冊には和歌が最も座りがよい。

銅板出版は美術的に重きを置くものに向き、費用のかかる出版物であったし、石版も職人の技術の高度な洗練が求められるものであった。素人上がりの者でもかかわれるのは、活字印刷であった。樋口一葉は職人の世界に通じていたようであり、また出版に興味があったようでもある。「たけくらべ」では何をやっても長続きしない半端者の三五郎が、活版所をもすぐに辞めてしまう。その程度の素人もかわった活字印刷によって和歌出版をおこした弾琴緒であるが、はじめは「官令出版会社」を興し、「官令出版」は時代の必要もあって事業の成功を得た。『桐園詠草附録』の巻末には「桐園

出版の歌集類」「彈舜平編纂の雜書類」という目録があり、そのな

かに「明治十一年ヨリ二十年迄官令出版会社ヲ始メ書林柳原喜兵衛方ニテ悉皆印刷製本シテ發行スト聞ク」とあり、明治十一年から明治二十年までは法規関係は柳原喜兵衛で印刷製本して「計六十八部冊数七十一冊出版」にもおよび

前記の歌書類は。いまだ。腐朽せざれども。後記の雜書は。法規規則の改廃によりて。今は実用になりがたく。恰も反故にひとし。されども師翁のわかきほどに物せられしものにて、書目なりともと思ひて。卷末にしるす

としており、法規関係の書籍發行を始めたのも、彈琴緒が大阪市の役人を時期は短いながらに勤めており、法規規則に通曉していたことによるが、経営的にはかなりの成功をおさめたようである。因みに、風雅の歌書を扱う場合は「彈琴緒」を名乗り、法規規則書を扱う場合は「彈舜平」を名乗り、雅と俗との使い分けをしている。

本稿であげる『神樂の舎五百首』は、明治二十二年を初刊行して明治二十五年に再版された歌集である。「定価金參拾五錢」として商業ルートに乗せたようにみえるが、実際は私出版の本が定価を表示することもままあることであつた。私出版として出版し、販路にのせて好調の様子の流れをみてから増刷にあたるという現在でも小規模出版社が使う手段が使われたのが『神樂の舎五百首』であつたようである。

再版されていることや、彈琴緒の出版事業のなかで再版にまで及んだものは数点に過ぎないのでのんびりとして出版社(桐園出版社)には、まずまずの本であつたことかと考えてよいであらう。

一、「神樂の舎五百首」

『神樂の舎五百首』についてあげたい。佐佐木信綱編『伴林光平全集』があつて、伴林光平の和歌集の最もまとまつたとされているが、他者の作が混じて載せられていることを指摘する研究者は少なくないようである。いづれにせよ現在は『伴林光平全集』があるため『神樂の舎五百首』のことを取りあげたものは皆無に近いようである。本稿では、彈琴緒の桐園社出版物という視点で『神樂の舎五百首』をとらえたい。

『神樂の舎五百首』の書誌からあげる。桐園は彈琴緒の雅号で、神樂舎(ささのや)は光平の号の一つである。

伴林光平と彈琴緒は、伊丹という地縁をもつて深いつながりがあつた。西村天囚・磯野秋渚編『古今歌話』には、大阪朝日新聞の読者投稿のなかから選んで一冊にしたものである。彈琴緒は、彈琴緒また桐園の投稿者名を使い投稿しているが、伴林光平の伊丹での逸話を寄せている。次にあげる。

(一八) 行燈の火

彈琴緒

伴林光平は若年の時は真宗の僧侶となれども、一寺住職する資格もなく所謂役僧となりて某村の道場に住み僅に粥の湯をす、りて、露命をつなぐ程なるに書見を好み近傍伊丹町なる中村良臣に、初めて歌学びを為すに書物なければ、借覽するに夜は燈火を点ぜんに油を買ふ錢なければ毎夜伊丹町に出て、饅飴屋の入口の長形の行燈の陰に身を潜かめて学問したりとぞ文久二年頃中山侍従忠光卿の南山の義軍に組し軍破れて、岩船山にて終に捕はれし時

楫をなみ乗てのがれむ世ならねば岩船山もかひなかりけり

維新の勤王僧の遺勲により従四位を贈られたるは、彼の饅頭屋の行燈の光輝の顯れたり、といふべくこそ

この歌話は彈琴緒の一つ話（ひとづばなし）であつたらしく、彈琴緒の家業は伊丹の造釀業（家伝では酒造業とも醬油造業とも）で、和歌は中村良臣の養子である中村良顯の門人であつたから、中村良顯から直話で聞かされたものであつたろうか。『古今歌話』は、西村天因・磯野秋渚が投稿から選ぶ際に、歌逸話のおもしろさよりも和歌の出来に重きを置いたというが、伊丹町の夜景に學問に打ち込む青年僧の姿がかすかに浮かぶ描写など「歌話」とよぶにふさわしい。

伊丹が近衛家領であり、富裕な酒造家たちの熱心な文化活動もあつて、幕末期国学和歌の盛んな土地であつた。その歌会の会場や古典講義の場となつたのが、寺院であつた。真宗は勤王僧が多く登場したことは知られているが、准門跡で宮中側の立場であり、近衛家は摂関家筆頭であつて幕吏も遠慮すべきところであつた。學問的に自由な土地であつたことは、山片蟠桃著『夢の代』の写本が多く、の蔵書家のもとに蔵されていたことや、大阪町人學問所の懷徳堂に學ぶ者や懷徳堂版出版の支援者が多くいたなど、伊丹の好學の氣風は地域の經濟的余剰から生まれたものだけとは言い切れないものがある。

『神楽の舎五百首』は、中本一冊で桐園出版の歌集・歌書に多い書型である。次に書誌をあげる。

書誌 ○書名「神楽の舎五百首」（題簽）・「さ、の屋五百首」（見返し）・「笹廼屋五百集」（内題）

○書型 中本一冊、上下二卷一冊

○丁数 序四丁・上二十六丁・下二十二丁・跋二丁（計五十四丁）

○奥付 明治二十二年四月二十六日出版 御届

同 二十五年六月十四日再版印刷竣功

定価金參拾五錢

同 同年 同月十五日再版 御届

大阪府東区高麗橋三丁目五十九番屋敷

発行者 彈舜平

大阪府河内国安宿郡郡国分村百十七番

編纂兼

出版者 西尾兵一郎

大阪府西区うつば下通一丁目四十八番屋敷

印刷者 瀬戸清次郎

大阪東区高麗橋通中橋筋 西入南側

売捌所 彈舜平邸内 桐園出版掛

○「笹乃舎五百集正誤」一葉、卷末奥付部分に添付

○見返 贈従四位伴林光平大人家集

山田義顯師校閱 西尾義隆編纂

さ、の屋五百首

双松亭藏版

「五百首」「五百集」と書名が内題、外題で異なり、編者は「五百集」（「緒言」などに）と繰返し述べるが、書名は題簽名「五百首」に統一しておくこととする。

二、『神樂の舎五百首』序文跋文

巻頭序に藤井千尋序が一丁、続けて中村良頭の序文二丁があるが、門人彈琴緒は誇らしい思いで出版にあたったことであろうが、中村良頭の序文は意外とあっさりとしたものである。

神樂の舎五百集序

よにをのことあれいてたらむものは荒魂和魂のふたつをそなへもてことあるをりはさかしき正をもふみなひけ荒ふる浪をもくえはら、かしてたけく雄々しいさをあらはさむことをねかひまたのとやかなる世には野山の花紅葉にうそふき河瀬のつき雪に舟はたをた、きて国ふたりをうたひ心なやかにこそあらまほしけれこ、に其人あり氏を伴林といひ名を光平とよへり此ぬし若きとは六条堀川の流におり立てあかをくみまめの月の光をしのひてしきみの露にそほちたりしを吾国のおのつからなる尊き神道の大路をうか、ひさととりてより仏の道は新はりなせる小道と見みなし墨染の衣をとりさりすつさうの数珠をきりすて桑の戸さしをあひなれて八雲の道の奥かき分入り人々をうまし道にいさなひ道引て詞の花の林にあそひ心静けく世をおくるをりしもかの大和なる五条の館のた、ならぬさわきを聞き国の為にとやかて心の駒打すにむち、みて人におくれす真野の峰の雲霧をしのきてす、吹風に身をさらし中津河の流にひそみてはうきせ浪を渡り岩をもさくへきちからをつくしたりしをあはれかなしきゆつかはくちけ矢はつきつひとらはれの見となりてつるきの血しほとなりはてにたれと世を嘆き国を思ふ心の花は草むすかはねにかくはしき名をと、めて土に落す世に薫りみてり

ぬか、るすちは早く人も書伝たれとてをとたくもす金のこゑ地をつらぬく玉のひ、きはいまた文箱の底にうつもればて、老翁かみやひたる和魂の光くまなくあらはさるをなけきこ、かしこの家々に秘めたる歌ともをうつしとりてかく物したる西尾義障ぬしかまめなる心のいたつきもまたたくなきさをにむ

中村良頭

この序文には、伴林光平の経歴や学統など縷々と述べているが、この序文オリジナルの記述は無い。序文は箔付けという色合いが強く、『神樂の舎五百首』の出版費用は資産家であつた西尾義障の負担によるものであり、西尾義障と中村良頭とは深い交流があつたとは考えにくいのではないか。西尾義障としては、伴林光平のバトロンであり、直門の誇りがあつて『神樂の舎五百首』を上梓するわけであるが、しかるべき著名の歌人の序文は備えたいところであつたろう。

中村良頭の序文の次に、編者西尾義障（兵一郎）による「緒言」が、一丁分ある。次にあげる。

緒言

余恒ニ思ヘラク和歌ハ 皇国ノ国風ニシテ学問ノ一助トモナレハ必ス此道ニ志サント幸哉去ル明治二十年夏ノ頃アリ余ニ和歌ヲ従通ス故ニ 初テ此道ニ入レリ熟々考フルニ昔往慈父ノ言ニ曰ク故伴林光平翁ハ慷慨悲憤ノ士ニシテ安政ノ末深く皇威ノ衰亮ヲ歎キ且ツ幕府ノ専横ヲ憎ミ南山ノ義拳ニ予セシモ不幸ニシテ囚トナリ身終ニ 獄中ニ死セリ然リト雖トモ誠忠ハ永ク千歳ノ後ニ香シク誰カ之ヲ痛惜セザラシ翁初メ南紀加納諸平ノ門ニ遊ヒ螢火雪光ノ苦ヲ積ミ万葉ノ風骨ニ擬シ一首以テ気概ヲ顯

スアリ古今集二做ヒ詞華優艶言ニ余意ヲ含ムアリ新古今ヲ模シ
幽玄体ニシテ其意深遠ナルアリ詩人所謂雄偉流暢縱橫磊落ノ
規矩ヲ自在ニ使用シ尋常歌學者流ノ及ハサルヲ所多モ唯惜ラク
ハ翁ノ家集ノ世ニ伝ラサルヲ此ニ於テ四方ニ散布セル詠歌ヲ
集メ笹乃屋五百集ト題シ四季雄長歌ノ六種ニ部類シ今回刊行シ
テ之ヲ公ニス浅学ノ生編纂ニ堪ヘスト雖トモ聊カ翁力在天ノ靈
ヲ慰メントスルノミ

明治二十二年二月四日

編者識

これによって、『神楽の舎五百首』は、西尾家二代に渡る好学の
家風が上梓に至ったことがわかるが、先代が伴林光平の門人であつ
たことが西尾義璋に深い誇りであつたことが察せられる。摂津伊丹
から河内国分村を通り奈良までの街道沿いの要衝の土地に点を落と
したように門人自宅があり、それを象徴するようにして『神楽の舎
五百首』の見返しには「贈從四位伴林光平家集 山田義頭師校閱
西尾義璋編集」とされている。因みに「双松亭藏版」とあるのは、
繰返し述べる西尾家の出資出版を示している。僧侶として赴任した
先で地域の檀家の結束をまとめるという職務を果たすなかで、和
歌月並会の運営、古典講釈のほうに情熱が注がれた結果といえばい
いかもしれない。

そして、巻末は山田義頭の跋が付されて、同書は締めくくられて
いる。次に山田義頭の跋文をあげる。

ともはやし翁の笹の屋集なれり此集はしも河内の国安宿部のさ
となる西尾義璋ぬしかねて翁か愛国心のふかきをしたひて其か
き残されたる短さくしきしあるは懐紙なとくさ、をあつめてな
は其うへに翁の歌を見きくことにかきとめて常に文つくるのう

へにおきて其歌の風格を味はひてたのしみとせりかくてその歌
数つもりて一千首の半にあまれるを吾はかり見てなどして埋木
にせんもほいなければこれをすり巻にして世の歌ひと達に見せ
まほしきよしをおのれに語られるゆゑけにまめやかなる志な
りとめでたく思ひてをり／＼西尾氏の家にかよひ共に心をあは
せてその歌の題をしらへ歌をわかちけるにや、清書と、のひて
ふた巻となりぬ題してさ、のや五百集と名つけたらおのれも若
かりし時翁のをしへをうけし身なれはいと、嬉しく思ふまに、
其ゆゑよしをひとこと書しるすものは翁のあらせたる志紀のは
やし村に宿近く住るかし原の里なる

山田義頭

これによって、明治二十年代になつて伴林光平の直門で存命の人
は少なくなり、目ぼしい人は山田義頭だけということがわかる。伴
林光平の遺著遺墨というと北畠治房男爵の極めが多く、光平亡きあ
との伴林家に関つたようだが、天誅組のメンバーとして爵位を得た
北畠治房は人望がなく、慕う人も無かつたようである。^(注1)

本文は活字版で、中村良頭の序と山田義頭の跋は自筆版下の木版
というのは桐園出版の常ながらも当時の歌人達の喜びぶりもよくわ
かることである。また、『神楽の舎五百首』の出版経緯が文飾なく
わかるのは、一番年長の山田義頭の跋である。この頃、旧派歌人で
奈良から河内、堺の一带の和歌宗匠として山田義頭は細々ながら
も、この地方月並歌会の添削をつとめているようで朱点の入つた月
並歌会原稿をこの地域の調査の際には時折みかけることがある。

三 『神楽の舎五百首』所収和歌

『神楽の舎五百首』は、西尾義障と山田義顯との収集点検によつて編まれたものということで、個性や特色が必然と生じてくるのであろうが、旧派歌集歌書は、ややもすれば家柄を誇り、過剰な美辞を弄した序文跋文の仰々しく並んだ私家版が少なくないのも事実だが、この点も吟味しつつ、詞書や和歌題に注目して『神楽の舎五百首』から和歌を拾いたい。部立にそつてあげていく。

春部

立春

たつ村のはるつけわたる雲の上にまつ大きみの千代そ見えゆく

水郷早春

はるをける梅津のさとに朝つく夜かすみかねたる空ものどけし

古陵霞

こからしにもすか音さえし耳はらの御陵のまつもかすむ春かな

吉野に物しける時下田の里にて

かりのなく下田とこそはおもひしかはなに袖ふる蝶もありけり

八木の里にて

とまるへき路ならなくにたをやめかこゝろひくなり青柳のさと

香具山のほとりにて

立ましるこすゑの花はちりはて、青かくやまにはるさめそふる

西行法師のすみし苔清水の庵をとひて

花ならてしるひとみなきたにかけにいまも宿もる水のおとかな

夏部

夏のはしめに二句は大和国の方言にて早苗開と云ことなりとか

さと人のさひらきいそくこゑすなり山ほと、きす今や来なかん
蟬

雨はるゝかた山はやしかせすきてゆふ日にさらす蟬の羽ころも
いし川のかはらましろにみつかれて柳にさやくせみのこゑかな
秋部

海辺立秋

住の江や松はらこしによる浪のしろきを見ればあきたちにけり

月あかき夜人のもとへ

はつ霜は身に寒けれとしらきくのまかきに、ほふ月もこそあれ

太田芳門か菊の花咲せりければ

くちはてむ垣根のきくも君か手になれて千年のいろやそふらん

菊の花さかりに中宮女王へよみて奉りける

のとかにもすめる君かなしら菊の千とせを殿の八重かきにして

十津川にありける頃思ふことありて

たき河の瀬々の暮あゆこゝろせよはては木葉にうもれもそする

九月十三夜の夕かた十津川郷長殿山をこゆとて

ほことりてゆふこえくれば秋やまの紅葉の間より月そきらめく

南山を出て都に赴んとする時平群の山中にて夜深く

宿るへきかたとたのみし谷の戸の火影はきえてきつねなくなり

奈良へゆく道すから超昇寺のわたりにて

八千草さき野の秋はむかしにて御陵のまつにしくれふるなり

冬部

冬のはしめの歌に

いさや子等霜おほひせよはなれやの軒のたちはないる付にけり

遠山雪

ひろせ川きしの尾はなはちりはて、葛城しろくゆきふりにけり
南山を出て駒塚にこもり居けるほと

みやこへといそくこゝろのこま塚を雲に埋みてしくれふるなり
吉野郷富貴の里にて

下もえのふきの里わのふゆこもり春まちてこそつむへかりけれ
法隆寺西園院にて

ゆめ殿はあらしのすゑに明そめてしに友よふいかるかのさと

八尾にありける頃としのくれに

三十あまりやつ尾の椿つらゝにおもへははやく月日なりけり
雑部

詠史

柴かきのみやこの小笹そよとたに風たゝぬ世をしろしめしけん
摂津国池田より多田へ ゆく道にて

石はしる瀧やまつたひこえくれはうき世に似たる鳥か音もなし

駒塚に住けるころ

たのしみのあるへき世とは思はねとうきを忘るゝ時のまもかな

八尾に往ける時

うきふしもひとつ二つと数へ つゝこの笹の屋も四とせへにけり

加納大人若山にかへられける時花下別人といふことを

わかれても忘るるまじき面かけのわりなくたとふ花のいろかな

有栖川の宮に召されける時

有栖川清きみきはにたちよりてふるきむかしのなかれくまはや

本願寺の門跡主此国に下向ありし時よみて奉りける

もゝとせの後まてにほへ藤のはな君かみけしのいろをとゝめて

易往寺をとひけるに義顕師にあらさりければ無量寿經の語に

よりにて

其名さへゆき易しとてこしかとも人なしといひて君そなかりき
山内繁樹翁七十賀に寄松祝

しけ岡の松のしけみは世の人の千代をかさぬるところなりける

松本光清ぬしを訪ひけるに愛女何かしに琴をひかせなとせら

るゝしらへいとあさやかなり

其曲 袖香蘆 玉川なりければ

引ならす袖のかをりにさくらはなちりての後もはるそのときき

岩崎美隆か身まかりけるをいたみて

影きえし夕やみからす又さらにけふの名残のをしくやはあらぬ

南山に在ける時あらされん此世の外のかかけいかなりやと聞

人のありければ

わか霊はなほ世に茂るみさゝきの小笹の上におかんとそ思ふ

天の川辻の陣にて

かやの実のあらしに薫るおとつれにましるもさむし山からの声

中山侍従君へよみて奉りける

ときのために荊からたちかり除てうもれし御世のみちひらきせん

銀峰山の陣より民家の焼るを見て

よしの山みねの水すゑやいかならんもみちになりぬ谷の家むら

大氷川の戦に味方の兵事なかりければ

みめくみのふかき氷川の神かきはうつやあられの玉もさはらす

風屋の陣にて思ふしありて

大かたはうはのそらにて思ふらんおくれし雁のこゝろつくしを

市の山御陵

まつ杉はしけりもゆくをいちの山いつよりあせし池のこゝろを

大和国法隆寺の辺なる古陵等おほかた畑にひらきてもの作るよしきゝて

田に畑につくるとすれと御陵やま千代のすかたはなほ残りけりいにし年の八月はかりすさましう野分吹いて、山も里もいたうあれぬるを後にきけは大和国菅原の伏見の御陵に盗人いりて御棺をあはきけるとなん里人の物かたるもいとかしこくおほえて

ふきた、す神の気吹のひとあらひ山のこゝろもうちきいてけり其後また桶並池の御陵も賊のあはきけるよしきゝて

たて並ていけも御陵につかへしをなと白なみの夜はにこえけん法隆寺の東南なる駒塚は立田園辺の御陵なるへく考出て其よししるしおかんとする筆の次手に

八千くさの園辺のはかはあれ果ていたつらになくくつわ虫かな外国の船よせこむなといひさわく年の正月はしめつたかた

よせくとも何か障らんから船の真帆ふきおくれはるのはつかせ

五百首より秀歌とおほしきもの、詞書や題に目立つものを選んだが、山田義頭との交流の窺えるものが、意外と少ない。伴林光平の戦記文学作品として著名な『南山踏雲録』から引いた和歌もあり、さまざまなものから集めた歌集といえるが、短冊や懐紙から集めたというのも文飾ではないようであり、多くの社中をあちこちに持ち、門人獲得に熱心であった光平の門人たちが師の和歌をこつこつと拾い集める様が浮かぶ。

伴林光平が墓陵調査研究した折の和歌もめだが、国学者の和歌では墓陵と「松」は取り合わせの題材によく用いられるものである。

むすびに

伴林光平は、和歌は速詠で速筆、紙があるとすぐに書き付けたという。突然に訪れた家に詩興が浮かぶと、ことわりなしに染筆するために、短冊や懐紙は隠したということがよく伝えられている。伴林光平の筆致をみると、雄渾、一気呵成なものは和歌詠みぶりとも相俟って人気を博したことが伝わる。多くの門人がいるのに細やかな対応ぶりが社中維持には大切なことであつたろうが、そういったことの余波が、本来の素人が長い和歌経歴の最後には自作歌集の出版を記念するのが一般的なかで、掻き集めた師匠の和歌の本を出版するということで満足を得るということと、伴林光平という勤王の志士の歌集ならば商品としても期待ができるという出版社の思惑があつて成立った出版物と言えそうである。

手元にある『神楽の舎五百首』の奥付をみると「明治二十二年四月二十六日出版御届」明治二十五年六月十五日再版届とあるので、出版したとしても在庫の山に値引きまですることがあつた弾琴緒にはありがたい本であつた。また、勤王の志士であり歌人として著名な伴林光平との縁を色濃く匂わせた本を上梓したことは出版事業の信用権威付けに有効な効果あることであつた。

こうした旧派和歌の出版物は、旧派歌人たちの交流を廻って成立ち、それらの出版情報は明治の御世の新聞紙によって広げられ、その新聞紙の広告力を利用したのも弾琴緒であつた。

「朝日新聞」（明治四十二年二月十二日付）に掲載の記事に次のようなものがある。

新刊紹介

○標註月瀬紀行

伴林光平 遺稿
彈 琴緒 標註

梅匂はん頃になりぬれば橘ならぬ昔の人の袖の香を偲ばんの心
にや琴緒ぬしの標註にて、光平翁の筆のあとの再び世に出づるに
至りぬ安政二年の紀行は明治四十二年の若梅と引比べて春の旅路
の伴にせんもまた一人の興なるへし好文木の古事何くれとなく考
へたれば只紀行とのみ見るべきものかは定価二十五銭、大阪高
麗橋三丁目彈舜平発行

この頃には、伴林光平直門の古老山田義頭も没しており、標註を
彈琴緒が付けることにクレームが寄せられることもなかったであろ
う。また、彈琴緒自身も、明治二十二年（四十三歳）に伴林光平の
『神楽舎の五百首』を上梓できたことは誇りであり、数は多くとも
素人歌人達による歌集歌書の請負出版とは重みが違っていた。営業
的にも成功を収めた『神楽舎の五百首』であるが、佐佐木信綱編『伴
林光平全集』が、昭和十九年に太平洋戦争という時事時勢を反映し
た頃では、存在意義の薄い本となってしまう。大正六年十二月十三
日に、七十一歳で彈琴緒は没しているが、琴緒が興した歌集歌書の
専門出版社、桐園出版は彈琴緒一代で幕を閉じたが、それは営業を
引き継ぐ者が無かったというだけではなく、旧派歌人はひっそりと
静かに影を消しつつあった。世代交代というものが、和歌の世界に
も近代化のなかでめまぐるしくあった。

伴林光平の戦記文学『南山踏雲録』は、上司小剣『伴林光平』（昭
和十七年刊、厚生閣）は上司家の人々が伴林光平門人で奈良の神官
家であったからである。それは、『伴林光平全集』が出版される時
代の機運ののって、保田與重郎『南山踏雲録』（昭和十六年、小学館）

も「コギト」による人々は、愛国精神の発露とした者も多かった。
このことは、昭和十年代のこと、彈琴緒の預かり知らぬことであ
る。

『南山踏雲録』の光平自筆本を石版におこした本が、明治二十九
年四月七日刊行されている。桐園社版『神楽の舎五百首』が上梓さ
れた明治二十二年の頃の伴林光平の人氣ぶりがわかるものである。
石版刷『南山踏雲録』、大和綴仕立で光平自筆の印影を写している
のだが、伴林光平のものが出版物としてさまざまなものが出された
わけである。そうした機運のなかで『神楽の舎五百首』が出された
ということは、彈琴緒にも出版社経営者としてのしたたかさが働い
ていたと考えてよいと思われる。

注

- 1 「9 彈琴緒—明治期旧派歌人による出版事業」管宗次著『京
大坂の文人 続々』和泉書院・二〇一〇年二月六日刊
- 2 (1) 一一九頁
- 3 『続浪速摘英』（発行兼編集三島聰恵・大正五年十二月刊）・
管宗次『彈琴緒「再撰 類題秋草集 初編」について』（武
庫川女子大学生活美学研究所紀要）第二十号、二〇一〇年十
一月十六日刊
- 4 佐佐木信綱編『伴林光平全集』（昭和十九年一月二十日刊、
湯川弘文社）
- 5 管宗次「6 伴林光平と種痘の和歌」（『京大坂の文人 続々』
一〇〇頁、和泉書院・二〇〇二年四月二十日刊）

- 6 木村三太郎『浪華の歌人』（昭和十八年四月三十日刊、全国書房）・森繁夫、中野莊次補訂『名家伝記資料集成』二卷（昭和五十九年二月一日、思文閣）
- 7 西村天因・磯野秋渚編『古今歌話』（明治三十九年十月十日刊）『伊丹市史』一〇五（伊丹市史編纂委員会編、昭和四十四年昭和四十七年刊、伊丹市）
- 9 末中哲夫『山片蟠桃の研究「夢の代」篇』（昭和四十六年三月三十一日刊、清文堂書店）
- 10 西村時彦『懷德堂考』（大正十四年一月一日刊、財団法人懷德堂記念会）
- 11 鈴木純孝『伴林光平の研究』（平成十三年十一月二十八日刊、講談社出版サービスセンター）、天誅組の乱に生き残り、男爵の爵位まで得た北畠治房はもとと法隆寺村の平岡末重の次男で、煙草屋（きせるや）と屋号をいい、中宮寺に出入りの商人であった。のちに、「布穀園主人」の雅号署名で伴林家に残る遺墨に箱書きを多くしている。明治十七年刊行の『大和国名流誌』の「○志士」の項の筆頭に「皇国学 和歌 法隆寺 従四位北畠治房」と載せられている（14『大和国名流誌』について）『京大坂の文人 続 幕末・明治 付』『大和国名流誌』和泉書院・二〇〇〇年五月十日刊九日刊）、伴林光平の門人で天誅組の乱に加わった者は少なく、北畠治房は、その数少ない挙兵参加門人の一人であった。
- 12 多田博「大和義拳百年を偲ぶ―勤皇歌人伴林光平」（古筆と短冊）第八号、古筆・短冊研究会、昭和三十七年六月三十日刊）

13 『貴重図書展目録 武庫川学院創立五十五周年記念特別展 書と短冊展示目録―万葉学者と万葉調歌人』（平成六年五月二十八日刊、武庫川女子大学附属図書館、文学部国文科）

（付記）本稿をなすにあたり、ご教示賜った彈泰幸氏には感謝申し上げます。伴林家に残る資料にはことごとく北畠治房「布穀園」の箱書きがあり。時折、古美術市場にあらわれる遺著遺墨にも「布穀園」の印記や署名、箱書きがほとんどのものにある。管蔵の数点にも「布穀園」の箱書きがある。男爵の爵位を得た北畠治房の晩年は天誅組の誉れとともに生きたかのである。彈琴緒には、饅飩屋の行燈の下に書物を読む、苦学修行の伊丹時代の伴林光平こそ慕わしくなつかしい伴林光平であったのであろう。それは、彈琴緒が会ったことのない伴林光平だが、琴緒には地縁では深い結び付きが感ぜられたのであろう。

（すが・しゅうじ 本学教授）